

## 第98回日本結核・非結核性抗酸菌症学会総会・学術講演会を振り返って

結核研究所

副所長 慶長 直人

2023年6月10日（土）、11日（日）、結核研究所所長の加藤誠也が会長を務め、東京新宿の京王プラザホテルにおいて第98回日本結核・非結核性抗酸菌症学会総会・学術講演会が開催されました。日本結核病学会は大正12年（1923年）に北里柴三郎先生らを中心に設立されたことから、この第98回の学術講演会は学会創立100周年記念大会としても位置付けられ、11日には市民公開講座「日本の結核予防の礎を創った人々」も開催されました。

学会設立当時を振り返るとわが国では毎年10万人以上が結核により命を落としており、結核は文字通り深刻な国民病でありました。しかし第二次大戦の終結後、経済の復興および官民一体となった対策の推進により、特に1960年代には罹患率が著しく低下してきました。ところが1980年代から90年代になるとその減少率が鈍化して一時期逆転上昇が見られたため、1999年には結核は過去の病気であるといった認識を改めるよう当時の厚生省より結核の緊急事態宣言が発せられました。その甲斐もあって2000年以降、罹患率は再び減少に転じ、2021年の結核登録者年報によると、ついに新規登録者数は人口10万対10を切るようになりました。ここでようやくわが国でも結核の低まん延化が達成され、次の目標である「根絶」へ向けて、世界と共に歩む基盤が確立されました。

WHO（世界保健機関）によると、2021年には世界で1,060万人が結核に罹患し、160万人が死亡しています。現在、結核は世界人口における死因の第13位であり、感染性の死因としてCOVID-19に次ぐ第2位でした。世界でCOVID-19が鎮静化しても結核が容易に終息することは全く期待できません。インフラが不十分な途上国から流入する輸入感染症としての薬剤耐性結核は、現在わが国の結核医療にさまざまな問題を投

げかけています。このような状況を打破して世界的な視野に立って結核を根絶していくためには日本の一層の努力が望まれます。

一方、難治な非結核性抗酸菌症は特にアジアに多く見られ、わが国の一般呼吸器科医の誰もが経験し、とても悩ましい状況になっています。本年度はアミカシンリポソーム吸入療法の知見が蓄積され多くの発表がありましたが、今後、効果的な感染予防法、さらなる革新的治療法の開発へ向けて、宿主要因、病原体、環境要因に関わるさまざまな研究の継続が必要とされ、この分野での日本の貢献は必須のものとなっています。

第98回学術講演会ではそのような背景のもと加藤会長が中心となり、次のような考え方に基づいて各プログラムが企画されました。①先人が尽力された画期的な研究や対策を振り返り、現代の高まん延国の対策に役立てる、②今後の対策のために、高齢者や外国出生者を含めたハイリスク者への医療・対策を検討する、③診断・治療・対策の新技术と開発に必要な基礎研究の議論をする、④欧米のみならず近年進展が著しいアジアの国々を含めた国際的な医療・体制・研究を俯瞰する、⑤非結核性抗酸菌症の医療・対策や基礎的な研究について十分な議論を行う、⑥エキスパート委員会企画として、幅広い参加者を対象として基礎的な知見含めて学ぶ機会を提供する。⑦新型コロナウイルス感染症による結核の疫学や医療体制に対する影響とその対応を議論する。

その結果、特別招請講演：1、招請講演：2、特別講演：2、パネルディスカッション：1、会長講演：1、シンポジウム：9、教育講演：10、エキスパート委員会企画セミナー：12、ICD講習会：1、ランチョンセミナー：10、イブニングセミナー：1、要望演題＋一般演題：

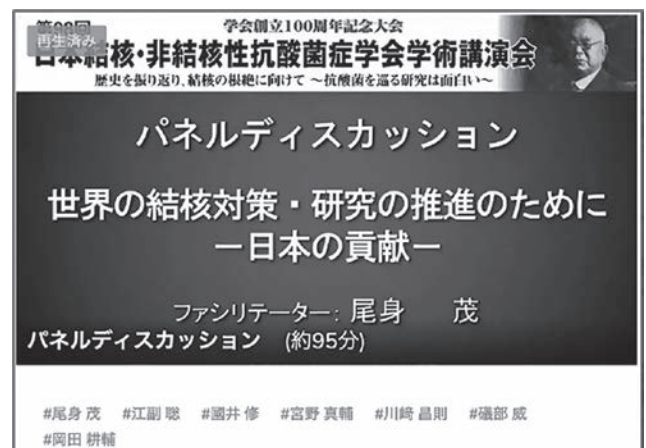
132題，参加者総数：約1,900名（現地：約860名，オンデマンド配信：約1,040名）を数え，この第98回の学術講演会は幕を閉じました。主催者側として改めて運営事務局を含む関係各位に厚く御礼申し上げます。

企画の段階ではCOVID-19の動向は不透明であり，実際そのために東京出張を控えてオンデマンド配信を視聴された学会員の方も多かったのではないかと推察いたします。しかし本年5月にはCOVID-19の位置付けは2類感染症から5類へと移行し，6月の開催は第8波と第9波の狭間の時期となり，学会会場では政府の方針に外れず，なおかつ感染症に関わる医療従事者としても違和感のない穏やかな感染対策ができたことは幸運なことでした。感染者が少ない時期であったため，主要演者や座長の感染に伴う急な交代という事態にも至らずに済みました。コロナ禍を経験し，現地開催を基軸にそれが不可能な場面では国際シンポジウムなどリモート参加，事前録画，オンデマンド配信など，参加／発表形態の自由度が広がったことは今後にも積極的に活かされていくものと思われま

す。特に日本結核・非結核性抗酸菌症学会 特別名誉会員のお立場から，秋篠宮皇嗣妃殿下より賜りました「やさしい日本語」のすすめのご講演は，会場に訪れた皆様にとっては大変印象深いものであったと存じます。また，Ibrahim Abubaka先生による Toward TB elimination : lesson and experience learned from Europe, Dennis Falzon先生による Innovations in tuberculosis prevention and treatment : recent trends and future perspective という世界の動向に関わるふたつの招請講演に加えて，尾身茂先生をファシリテーターに迎えた「世界の結核対策・研究の推進のためにー日本の貢献ー」と題したパネルディスカッションでは，特に国際分野での人材育成が急務であるという点

が強調されました（写真）。これらのプログラムには，日本の結核に関わる先人の足跡が今後，国際的視野を持つ若い世代に引き継がれて，世界と連携しながら将来の結核根絶につながっていくことを願う主催者側の熱い思いが色濃く反映されておりました。

本学術講演会は，初期臨床研修医，学生会員，医学部学生，看護学部学生，看護専門学生等は無料で参加できますが，合わせて16名ほどの登録にとどまったことは残念に思いました。今後，学会としても教育機関に直接働きかける，高まん延国出身の留学生に情報提供を行う，ソーシャルネットワーキングサービスを積極的に利用するなどして，若い学生のうちから抗酸菌感染症の現状と課題に触れていただく機会を提供する必要があるのではと強く感じました。🍷



写真：パネルディスカッション ON DEMAND 画面